

くつくつのそこら

「よっ、と」

手首のスナップちよいつときかせる、丸いものがふわっ、と浮かんだ。

「せえ、のお」

ちよつとこげた、茶色いたま。冬の公園を背景に、ちよつとだけみどりの模様が、目の前でくるくる回つてゐる。

「はむっ！」

ベンチからちよつと腰を浮かせて、口から迎えに行つてあげる。すぐにいつものいい香りが、口の中いっばいに　ん？

「　っぐー」

ひゅっ、と吹いた風に乗って、たまが勢いよく入ってきた。口の中　じゃなくて、奥に!!

「こあら！　まずそんな顔すんじゃないよ。お客さんが逃げちゃうじゃないか」

いや、そんなこと言われたつて　ぐえっ。

「はいはいはい！　なきさ、おみずっ！」

胸を何度か叩きながら上向いたとこに、丸っこい顔が迫つてきた。いきなりあたしの口開け　て!?

「こあ!?!　ぐくぐくがげがあ　ぶはあっつ!!」

「うあ！　ちよつとちよつとちよつとあ、飲まなきやダメだよあ！」

はあ、はあ、はあ。あゝ、苦しかった　っにして　もっ！

「ちよつと志穂！　あたしを殺すつもり!?!」

じろっ、と上を向いたあたしの目に、口とがらせた丸い顔が飛び込んできた。

「えゝ？　ちゃんとおみず飲ませてあげたじゃなあゝい？」

うあ。心底ふしぎそうな顔してるよ、こいつは。「ピッチャーで水流し込んでいて、どこが『飲ませ

てあげた』ってのよっ!!」

「なんか、むーっとしてるけど、ちょっと許したげないよ。これは。」

「ちよい待ったっつ!!」

へ？

志穂が振り向いたその先、屋台の中であかねさんが腕組んでる。

「ケンカなら、まずそこのを片付けてからにしまよ。それこそお客さん逃げちゃっからさ」

あたしの足元には、水まみれの丸いものが転がってた。さっき口から出しちゃった、たこ焼き。

はぁ、ってため息ついて、ベンチから立ち上がろうとしたあたしの前に、ひよい、っとペーパータオルが出てきた。

見たらいつの間にかしゃがんでた莉奈が、たこ焼きくるんでゴミ箱に放り込んでる。

「志穂、あわてすぎだよ。右手と左手間違えてるじゃん」

言われて見てみたら　　ありや、ホントだ。志穂っ

たらピッチャーとコップ両手に持つてるよ。

「あ、あは、あははは。いやー、失敗しっぱ　　うひゃあ!」

あゝあ、水入りコップ持ったまんまで頭かいちゃうんだもんなあ。あたしは思わず吹き出しながら、バツグの中からタオル出した。ま、志穂がそんな意地悪するわけないか。

志穂の頭とコートを拭いてると、横から莉奈のため息が聞こえた。心配させちゃったかな？　あとでフォローしとかなくちゃね。

「それにしても、なぎさにしちゃ珍しいよね、失敗するなんてさ」

あかねさんの声、なんだか妙に上機嫌で、ちょっとだけカチンときた。そりや、みんなの前で失敗したことなんて最近ないけどさ。　　ああ、タオルの下で、志穂がくすくすやってる。こりや、名誉挽回しとかなぎや。

「ちよつと風が強かっただけですよ。今だったら絶対だいじよぶ！」

「って言いながらタオルをバッグに戻してる前で、志穂がわくわくした目でコップ持って待ち構えてるよ。ったく、見てなよ！」

「あたしはまたベンチに腰かけて、冷めちゃったたこ焼きひとつ、楊枝でつまんだ。風が吹いてないの確かめて よいつ、と」

「あゝ」
「回ってるたこ焼きをじつと見ながら口あけて、狙いを定めて」

「あむっ」
「へ？いきなりあたしの上に出てきた口が、たこ焼きくわえちゃった??」

「ん、おいし♡」
「ふわっ、と顔に流れた長い髪をかき上げて、出てきたのはいつもの顔。」

「ふぶぶ。どう？うまくなったでしょ」

「って、ええっ!？」

「ほのか？なんで!？」

「ちよつと、練習したのよ。あかねさんにも手伝わってもらって。ね？」

「屋台の中で、あかねさんが笑いながらたこ焼き作ってる。志穂たちも、なんだかにやにや。な、なによいったい？」

「ね。どっちが早く食べられるか、試してみる？」
「自信たっぷりなほのかの後ろから、あかねさんが小さなたこ焼き出してきた。莉奈までコップ持ってスタンバっちゃってるし。」

「うん、そういうことなら、よあし！」

「負けた方がふたり分おこり、でいいね？それじゃいくよっ!」

「まあ、おごったげるからさあ。ふた皿くらい」

そばにいるはずの、あかねさんの言葉が、遠くの方から聞こえてくる気がする。

「でもでも。天才っているもんだよねえ」

志穂の言葉も、なんだかふわふわしてる。目のすみには、困った顔のほのか映ってるだけ。

「ええと、その　ごめん、って言っちゃいけない、わよ、ね？」

「は、は、ははは　はあ」

ほのかの手の上、からっぽのお皿見ながら、あたしは無理して笑ってみた。

あたしの皿には、まだまだたこ焼き残ってるんだよね

「なぎさー。おーい」

「だめだめだーめ。まるつきり、あっち行っちゃってるよ。なーむなーむ　」

「あー、なんだかツツコむ気にもならないよ。」

「なぎさ」

志穂がケラケラ笑ってるのをぼーっとしながら聞

いてるあたしの耳元に、息がかかった。

「あの子——ほのかちゃんね、ホント頑張ってたよ」

こっそりの声の方に目だけ向けてみたら、いつの間にか、あかねさんが屈みこんでる。

「最初はそこらにこぼしちゃってね。あたしが怒ったら何度も頭下げて　でも、どうしても出来るようになりたい、って聞かなくてねえ。」

だからさ、ちょっと落ち込んだじゃうのはわかるけど　ほめてやんなよ。ね？」

立ち上がって屋台に戻ってくあかねさんから、目をほのかに移してみた。志穂たちがぎゃいきゃい言ってる中で、何度もちらちら、あたしの方見てるよ。まだ困った顔のまま　うん、そうだね。

「でも、よくできるよねえ。いつもは、たこ焼きなんて食べないでしょ？」

莉奈の言葉で、ほのかの顔がもっと困っちゃった。まったく、もう。

あたしは立ち上がって、すう、と息を吸い込んだ。

「こあらつ、ほのかをそんな目で見ないの！ お弁当だって、たまに一緒してるじゃん」

ふたりの肩に手を置いて言ったら、ほのかがちよつとだけ、ほつとした顔になった。ふう、間に合ったか。

「あ、そっか」

「普通だったよね」

あつたりまえでしようが、もう、まーた変なカベくつつちゃつてんだから。

「ごめんごめん。でも」

「うんうんうん。なんかね、食べてるもの違うような気がしちゃつてさ。冬だったら、カニとか」

あー、なんとなくわかっちゃう自分がイヤだね。さて、ほのかがまた困っちゃう前にフォローを　　つて、あれ？

「カニ？ カニ、食べたいの？」

困った顔、じゃあないな。どっちかって言うとおちよつと喜んでるみたい？

「カニなら、これから　あ、ねえ、ユリコ？」

ほのかにつられて顔を上げたら、見たことのあるメガネさんがこつち見てた。目をまんまるにして。

「あえ？　ほのか！　なんでこんなところで油売ってるのよっ!!」

こんなところで、わーるかったねえ　つていうかよく見たら、この子もほのかも制服のまんま。コー

トも着てなきやカバンも持つてないじゃない。帰りがけじゃなかったの？

「ええ、ちよつと見つけたから」

「ちよつと、じゃないわよ。こつちは大変なんだからびゅん、つて音がしそくなぐらいの勢いでこつち

来たと思つたら、ほのかの前に仁王立ち。これ、ぜつたいあたしたち目に入つてないな。

「大変つて？」

「みーんな、帰っちゃつたのよ。あのカニ見せたら」

その瞬間、目の前が凍つた気がした。少なくとも、ほのかとメガネの子——ユリコちゃん？——のまわ

り、ムチャクチャ寒いよ。

「 ユリコ? 」

「 い、いや、ほら、カニなんて食べなれてないから、みんないらないうって言うてさ 」

ユリコちゃんが、あわててる。寒い空気がきまぜるみたいに手を振って。でも、

「 ユリ、コ? 」

「 だ、だからほのかにあげるから、食べてって 」

こ、怖い。背中が冷たくなってるのがわかるよ。こりや爆発まで、3、2、1

「 ユリコっ! 」

ほらきたっ!

「 わかってる、わかってるわよ。反省してますって 」

目え開けたら、もうちょっとでメガネはずれちゃいそうなくらい首ぶってた。両手広げて、ため息つきながら。それにしても、ほのかがこんな爆発するなんてねえ。

あれ、こっち向いた。にっこり、って音が聞

こそうなくらい、あたしに笑いかけてる?

「 ねえ、なき 」

「 パスっ! 」

考える前に声が出てた。

「 あん。まだ何も言っていないじゃない 」

まだにっこりの、ほのかの顔。でも、あたしはだまされないからねっ!

「 言ったも同じだよ。どうせ、カニ食べない? って言うんでしょ。パスパスっ! 」

化学部の子が、見せちゃいけないもの見せちゃって、で、それがカニってことはさあ、つまり、そういうことでしょ?

「 え? なんてなんでなんでえ? いいじゃん。カニなべえ 」

志穂、あんた死にたいの? とはさすがに言

えないけど。でもなあ。

「 あたしもいい? カニなべなんて、あんまり食べられないしね 」

ああ、志穂だけじゃなくて、莉奈までその気になってるよお。怪しい雰囲気気が付かないの??

「なべがいいのね? いいわよ、ユリコとふたりじゃ食べきれないから。でも なぎさ?」

ほのかが、じっとあたしを見つめてる。いつの間にか、志穂たちも、ユリコちゃんも、じいっと。あああ、もつっ!!

「えーいつ、わかったわよもつー! 煮るなり焼くなり好きにしまよっ!!」

「いや、だからなべだつてば」

みんなのツッコミの向こうで、ほのかとあかねさんが笑ってた。

「ふう」

ため息で一瞬、目の前が白くなった。まだ日は落ちてないのに、やっぱ寒いんだなあ。

たこ焼きの屋台からここまでとつとこ歩いてきたけど、ほのかたちが見えなくなると足が勝手に遅くなる。われながら、素直だよねえ。

それにしても、まいったなあ。ほのか探し回つて、やっと見つけたと思ったら美墨さんたちと一緒になんだもん。つい口がすべつちゃったよ。久保田さんたちが乗ってくれなかったら、今ごろどうなってたか

「ねえねえねえ、ユリコちゃん。コートなしで寒くない?」

横から声かけてきたのは、ラクロス部の久保田さん。ああ、そうか。一緒に歩いてたんだっけ。

で、寒くないかって? そういえば、寒いはず

なのにあんまり感じないな。ま、ほのかの爆発に比べたら、このくらい大したことないってことかもね。

「さあ、ほくの胸においでえ あつたためて、あ、げ、る♡」

わたしが考えてたら、久保田さんの声がなんか芝

居がかってきた。こっちに向かって、コートの前をぱつと開いてばたばたしてる。

「なにバカなこと言ってるのよ」

ぱたぱたやってるコートをつかんでボタンをとめながら、ひとつため息。部外者だからしかたないんだけど、ねえ。

「え〜？ 乗らないとつままないよあ」

「久保田さんは平和でいいよねえ」「ついつい口に出ちゃうな。グチだとはわかってんだけどね。

「ここからこ〜らっ！ そんな堅くない、って知ってるんだから。いまさら取りつくろってもだ〜め！」

別に堅いってわけじゃ　ほのかが料理の買い物

済ましてるとぱっかり思ってたのに、この姿で買出しの追加だもん。ため息も出るよ。

っていつか、久保田さんの方が一緒に買い物行くつ、って言って引張ってかれたんだよねえ。でも、よく考えると変だな。

「それはそうと　なんで、わたしだけなの？ 高

清水さんと一緒じゃなくていいの？」

「莉奈はねー、なぎさの監視よあ」

監視??

「こないだ、ほのかちゃんとこ行ったときさ、なぎさがチョコ買いまくって困ったじゃん？ ほのかちゃん、そういうところ甘いからねー」

ほのかが、ねえ。なんとなくわかるような気がするけど。でも、だったらみんな一緒にいればいいのに？

「　なんとなくさ、ほのかちゃんとは別になりた　いんじゃないかなー、って思ったん。違ったらごめんねー」

立ち止まってぼそつ、と言った言葉にびっくりした。まるで、わたしの心を読まれたみたい。意外って言ったら悪いけど、よく見る子なんだなあ。

「あ、ううん。それは　ありがとう」

「ん。でさでさでさ、カニって、食べられるんだよね？」

久保田さんが大きな目を開いて、わたしを見つめてきた。ああ、やっぱり訊かれたか。ふう、見たら化学部員でも逃げ出しちゃうくらいなんだから、説明したくなかつたんだけど。

わたしは大きく息を吸って よし、覚悟は決まった。逃げるなら、逃げなさいよ。

「食べられるのは保証するわよ。わたしも食べるし。で、何に使ったか、っていうとね」

「ストロップ！」

え？ 目の前に、手？

「それは言わなくてもいいよ。あたしはただユリコちゃんから、だいじょうぶ、って言葉が聞きたかつただけ」

わたしの口をふさぐように出された両手が、すつと降りた。久保田さんの顔、なんだか照れたみたいに見える。

「さあて、莉奈にも口止めしとかなくっちゃあ。なぎさは まあ、しょーがないかもしれないけどさ」

「久保田さん」

照れ笑いがちよつと苦笑いに変わって、わたしの言いかけた言葉はそのまま消えちゃった。

「なぎさ、ほのかちゃんと仲いいからねー。中の中までちゃんと知らないといられないかもね」

苦笑いをこまかすみたいに、頬をコリコリかいてる久保田さん見てたら、

「知らない方がいいことだって、いっぱいあるんだけど」

思わず、言葉がこぼれてきちゃった。

「そうそうそう。でも、なぎさは訊いちゃうんだよ。それで自分が傷つくことだってあるのに、やっぱり訊いちゃうの。そういうところ、かなわないよねー」

そこまで言って、久保田さんが大きく息吸った。吐いた息の白さが薄れたあとも、ちよつとだけ苦笑いが残ってた。

わたしたちは、そのまま黙って駅前のスーパーま

で歩いた。迎えてくれるのは特売のポスターと、店頭販売の野菜たち。

その中にひとつ、目に付いたものがあつた。いつもだったら気にもならないもの。こんな状況で気にする方がおかしいもの。でも

久保田さんの顔をちらっと見て、わたしは決めた。どうせカニは目いっぱいあるんだよ。ちよつとくらいこんなことに使つたからつて、悪い？

「ねえ、久保田さん。なべの材料にも色々あるんだけどさ」

わたしがそれを指さしたら、久保田さんが一瞬、ぎよつとした。けど、

「うんうんうん！ ユリコちゃんつて、やつぱ最つ

高お

わたしの背中をバシバシ叩いてる久保田さん、とびっきりの笑顔に戻つてた。

ぞつ、ぞつ、ぞつ

寒い街を、ももをちよつと上げながら歩いてく。音だけ聞いていると、まるで行進でもしてるみたいだね。

「ねえ、なぎさ？」

すぐ横から、ほのかの音が聞こえてきた。あたしはそのまま歩きながら、

「なによ」

言葉がむつとしちやうのは、行進のじゃまされる気分だからかも。

「なんで、こんな歩き方してるの？」

「決まつてんでしょ。歩幅そろえないと、コート脱げちやうじやん」

ぞつ、ぞつ、ぞつ

調子よく歩いてるはずなのに、商店街がちつとも近づかないな。さっさとなべの材料買つて、学校行

かなきゃならないのに。

だいたい、志穂たちはどこ行ったのよ。みんなで一気に買出しした方が早いのに、いつの間にか、あの子と一緒にどっか行っちゃってさ。

「ねえ、なぎさ？」

またほのかの声。ほっ、ほっ、って息ついてるくせに、無理して声かけなくてもいいのに。

「だから、なによ？」

「コート、無理してふたりで着なくてもいいんじゃない？」

ほのかが肩からコート外そうとしたんで、あたしはあわててその手をぎゅっつつかんだ。まったく、こつこつとこ融通きかないんだから。

「こつの寒いのには、コートなしで歩かせらんないよ。風邪ひきのほのかなんて、あたしはもう見たくないんだからねー！」

ぬっ、ぬっ、ぬっ

ああ、やっと見えてきた。駅前の商店街、八百屋に肉屋に魚屋に

「ねえ、なぎさ？」

「だーからあつー！ なんなのよ、さっきから!?」

思わず立ち止まって、ほのかの顔を覗き込んだら、

「ちよつと、恥ずかしいんだけど」

「あー」

よく見たら、あたしの腕がコートつかみながらほのかの腰に回ってた。うっかりして、ほのか抱きかえちゃってたんだ。

「外では、ちよつと ね♡」

「だあーっ！ もう、なにが『ね♡』だよ、こいつはあああつっ!! そのくせ、あたしがコートから手離すの待ってるし。もう、どうすりゃいいのよ、これ!!」

「もしもーし、そのバカップルうー」

「なにいつ!？」

「だーれがよー！ って、え？」

振り向いたあたしたちの前に、心底あきれ顔の莉奈がいた。あ、そっか。忘れてた。

「一応言っとくけどさ。別に、隠れてつけてたわけじゃないから」

なにも言わないで後ろ歩いてたらおんなじだあゝつっ!! っつて、あれれ？

あたしとほのかの背中から、コートがなくなった。莉奈が片手で器用にまるめて、カバンに乗せて、それからあたしたちの前に、人さし指がひょい、つとのびてきた。

「そんだけ真つ赤な顔なら、コートなんて要らないでしょ？ ほら、もう店に着いたんだから。買い物買い物っ!」

「春菊、しめじ、にんじん、豆腐、タラの切り身に鶏肉、と　ねえ、ほのか。あと、なにがいるんだっ

け?」

商店街についたとたんになぎさが消えたと思ったら、いつの間にかわたしの目の前。野菜を抱えながら、指折り数えて買うもの確かめてる。あっけに取られてみてたけど、

「ええと　なぎさ?」

とっさに言葉が続かなかった。いつもだったらさぐに出るのだけど

考え込んでいたわたしの肩に、ぼん、と手が乗ってきた。手の先では、莉奈ちゃんがやれやれ、っていう顔でわたしを見ている。

「言いくいんでしょ? まかせて」

そう言つと、すう、と、音が出るくらい息吸って、「なぎさ。それでなに作るの? 『タラちり』? 『水炊き』? まさか『カニなべ』って言うんじゃないでしょうね?」

「え? え? 違つなの?」

なぎさの目が、わたしに助けを求めているわ。でも、

ちらつとわたしを見た莉奈ちゃん目が『甘やかしちゃダメ』って言ってる。ここは、お願いするしかないわね。

「あたしだって食べ慣れてないけどさ、だったら、ちゃんと先生に教わんなきゃダメじゃん」

「そっか。あはは、まーたやっちゃったよ」

なぎさが野菜を返しに行つて、八百屋のおじさんに頭下げてる。頭をかきながら、困った笑い顔しておじさんも笑いながら、野菜を元に戻してる。ほんと、なぎさって誰にでも好かれるのよね。

「さあ、雪城先生？ 教えて教えて」

なぎさが戻ってくるのを待つて、莉奈ちゃんがわたしに言った。からかうみたいな口調だなあ、って思うのは、ちょっと考えすぎかしら？

「そつね。だしがちょっと弱いから、だし昆布は要るわ。それとお野菜、白めの長ねぎに白菜を少し。香りが強すぎるのはダメよ？ きのこは、えのきかしいたけもいいわ」

そう言いながら、わたしの目はなぎさを追っていた。なんだか、少ししょげちゃってるみたい。こんなの、ただ知っているかどうかだけのことなのに

そこまで考えてたら、言葉がすつ、とこぼれてきた。

「普通は、ね」

「普通は？」

ふたり一緒に反応ちゃってる。思わず、吹きだしそうになっちゃった。

「うん。普通のカニなべなら、あとはタレだけ考えればいいと思うけれど カニね、すっごくあるの。5人でも余るくらい。だから、ね？」

そつよ。わたしの知ってるなべなんて、本を見れば作れるんだもの。

「好きなもの入れて、好きなタレ作って、みんなで食べっこしてみない？」

ぱつと晴れたなぎさの顔の向こうで、莉奈ちゃんがまんまるな目でわたしを見てた。

わたし、変なこと言ったかしら??

学校が見えるころには、空がもうオレンジ色。3人並んで歩いてて、ちよつと横を見たら、ふたりの顔も少しオレンジに光ってた。

なんか、不思議だなあ。ウンチクの女王とラクロス部のホープ、違つ世界の子とちよつとした憧れ、だったんだよね、一年前は。なのに、今はふたりとも、すぐ隣にいるんだもん。

あ、なぎさがあたしの顔、のぞきこんでる。あたしは買い物袋をぱつと開けて、中見てるふりしてごまかした。

それにしても、結構買ったなあ。3人別れて買い物したから、ふたりがなに買ったのかはわからないけど。へへ、あたしは完璧なんだから。見てなさいよ、なぎさ。

あとの心配は 志穂かあ。ユリコちゃん落ちつかせに、どこまで行ったかな？このなべやる前に

話はしときたいんだけど、ふたり置いて探しに行くわけにも、ねえ。

「おい、り〜なあ」

あ、あれ？あたし呼んでる。だれ？ って、よく見たら、校門のところで立ってる丸い顔、志穂じゃない。

うあ！なぎさが飛び出そつとしてるよ。押さえて、押さえてって。

「こあら！志穂、今までどこ行ってたのよ。こつちは買出ししてたつてのに！」

「買い物よお。ユリコちゃんと一緒お」

そう言われて、なぎさがほのかちゃんと顔見合わせちゃった。そういえば、ふたりには言つてなかったっけ。ごめん、なぎさ。

「遅い遅い遅あ〜い。ユリコちゃんなんて、もう理科室で準備はじめちゃつてるよ」

あーあ。楽しそつだなあ、志穂は。人の苦勞も知らないで って、いまなに言つた？たしか、

「理科室う!?!」

「ええ、そつよ」

いきなり隣から答えが来たよ。ほのかちゃん??

「家庭科室の使用許可はとっていないし、それにちよつと 問題になつちやうから」

「も、問題??」

思わずなぎさとハモつちやつたじゃない。いや、彼女もユリコちゃんも、悪い子のはずない、と思つ、けどさあ

「ああーつつ!!」

口を開こうとしたあたしの目の前に、いつの間にか志穂が来てた。両手をにぎって、思いつきり口あけて、

「それよりそれより! みんなが持つてるのって、なべの材料でしょ? ほあ、さっさと運んじやおうよ。ね? ね?」

志穂の目が、あたしに向かってパチパチしてる。

うん。わかつたよ。

あたしは軽く息すつてから、なぎさの目を見た。

「まあ、いいじゃない。さっさと運ばないと、なべの途中で帰ることになつちやうよ。ほら、なぎさ!」

「え? あー、まあ、莉奈がそう言つんならいいけどさ」

「莉奈、サンキュ」

理科室に走つてくなぎさたちの後ろをついてつたら、そおつと近づいてきた志穂が、「こそつ、と言つた。

あたしはその背中に手を回しながら、しばらく並んで歩いてつた。なぎさたちが見えなくなるまでスピード落として、それからあたし、志穂の耳元に口を寄せた。

「あたしも混ぜないと、ひどいからね?」

あたしがにやつ、と笑つたら、志穂はポンポン、って肩たたいてくれる。

やつぱり、志穂とが一番息が合うわ。あたし。

志穂たち、遅いなあ。どこで油売ってんだろ？

あたしが廊下のむこうを覗き込んでたら、となりでほのかが理科室のとびら開けた。

ふわっ、とあつたかい空気がやってきて、思わずほっと息ついちゃった。もうなべでお湯沸かしてたんだね。実験用のガスバーナーの上で、一人用の小さななべが、カタカタ揺れてるよ。

「みんな遅いよー。もう5人分、なべ用意しちゃったからね」

いつものメガネのユリコちゃんが、腰に手を当てて、あたしたちに言った。

「あ、メインの大なべはこのあとね。まずはみんなのオリジナルなべ、いってみよ」

へえ、ほのかと同じこと言ってるよ。やっぱり、長くつきあってるだけあるなあ。

さて、と。あたしはどのなべにしようかな？もち

ろん、みんな同じなんだけどね。なべの周りに、紙のお皿に乗ったカニの足があるから。いいの選ばなきや

「あら？ ユリコ、ちょっとカニ少くない？」

え？ ああ、言われてみれば。ひとつのなべに5本づつくらいだもんね。ほのか、さつき5人じゃ食べきれない、なんて言ってたはずだっけ？

そう思ったら、ユリコちゃんのメガネが光った。

「久保田さんならともかく、ほのかがそれ言う？」
な、なんか迫力あるなあ。いつたいなにかあ

りや。ほのかが、しまった、って顔で口に手を当ててるよ。まさか、またなんかやったんじゃないでしようね？

「わかったら、メイン用のカニ足5人分、あとで持ってきて」

につこり笑ってるけど、メガネまだ光ってるように見える。ほのかの方も苦笑いしてるし。はあ、しょうがないな。

「あたしも手伝うよ。さっさと終わらせ
その先が言えなかった。ふたり揃って、ちろっ、と
あたしの目を見てる!？」

「見ないほうが、いいわよ?」

ハモった声ですごく低くて、あたしは思わず息
を飲んじゃった。

「さ、さあー、なべ作ろつか。どのテーブルにしよう
かなー」

われながら白々しいけど、あのふたりが組んだら
なにはじめるかわかんないもんね。ええと、奥のテー
ブル行こうかな。

それにしても、いつもは5人くらいで実験してる
テーブルに、小さななべひとつづつ。広いなあ。

「なんだか、無駄づかいしてるみたい」

あたしがテーブル見回したら、となりでほのか
がぼそっ、と言った。まあ、そうなんだけどね。

「出菜上がったら集まればいいじゃん。広いほうが、
失敗したとき被害が少ないしね」

ほのか、あたしの方を上目づかいでまたちろっ、と
見てる。あ、あれ? いつの間にかユリコちゃん
に、あとから来た志穂たちまであたしのまわりに集
まって、って え!?

「みんなであたし見てうなずかないでよ!!」

両手振り上げたら、一気に逃げてっちゃった。はあ。
ま、いつか。とにかく広いほうが、仕掛けがやり
やすいんだから。

なべの中のお湯をすこし捨ててから、あたしはみん
なに隠れて、買ってきた材料を入れはじめた。さあ、
見てなよ!

「美墨さん、いい?」

隣のテーブルにいたユリコちゃんから声がかつた
とき、あたしはちょうど火を止めたところだった。

顔を上げたら、前に並んだテーブルで3人がじっ

とあたし見てる。あたしがビリかあ。いやー、こんなに難しいなんて思わなかったよ。実験用のガスバーナって、弱火にしようとするって消えちゃうんだもんなあ。

「それじゃ、せえの、で全員いっしょにおひるめ、いっくよー!」

「元気だなあ。ああ、ほのかやユリコちゃんは慣れるからか。ん、疲れててもしょうがないや。気を取り直して、なべのフタに手をかけて、よし!

「せえ、のお」

「せつ!!」

みんなで一斉にフタをとった。一面まっしろになつてから、ぷうんといい匂い。へへへ、あたしのは、ちよつと違うでしょ。って、あれれ?

「ほらほらほら、なぎさ」

「なぎさ、こつちこつち」

「なぎさ〜」

あ、あら〜」

あつちこつちから、あたしを呼ぶ声がした。それ

といっしょに、どっちの方からも同じ匂いがつていうか、これってまさか、

「チヨ、チヨコなべえっ!」

「え、え、ええっ!?! 莉奈もあ??」

「志穂に ほ、ほのかちゃんまで!?!」

あたしの正面で、3人が顔見合わせちゃってるよ。

あゝあ、なんだか笑つちやうなあ。

「まったく、みんなして同じこと考えるなんて、ねえ。

ほら、わたしは牛乳なべよ」

隣からの声で、あたしは固まっちゃった。い

や、その、だつてさ。

「ええと あたしもそうなんだけど」

「えええっ!?!」

メガネから飛び出るくらい開いた目を見て、あたしは吹き出しちゃった。あはははは。こりゃ、同じこと考えてたな、きつと。

ああ、ユリコちゃんも苦笑いしてるよ。ちらっとほのか見てさ。

って、あれ？

「あ、う、うくっ」

え？なに？ほのかが口に手をあてて、ふるえる？

「ちよつと、ほのか？調子、悪い？」

ほのかのいるテーブルまで行って、背中をさすった瞬間、イヤな予感がした。

「くっ あっははははははっ！」

「ほ、ほのか？」

近寄ったなぎさが、目をまんまるにしている。

「ちよつちよつちよつと！どうしたの、ほのかちゃん!？」

あたしも、声が上がっちゃった。ほのかちゃん、おなか押さえながら大笑いしてるんだもん。

「しょ、しょうがないなあ。ほら、つかまって」

「なぎさ？」

一瞬、なぎさが驚いたような顔したんだ。はっとした、って感じ。

「ごめん、志穂。ほのかといっしょに、カニ取ってくるよ。先食べてて」

そう言って、ほのかちゃん半分背負いながら、理科準備室のとびらの向こうに消えてった。けど、笑い声はまだまだ響いてる。

な〜んか、あやしいぞあ。

「さっすが、美墨さん。よくわかってるわ」

あれ？ユリコちゃんにか知ってるの？

「ねえねえねえ、大丈夫なの、あれ？」

「ん？ええ、大丈夫。さーさ、今のうちに食べちゃおうか」

あたしは、ちよつとだけぼかん、っとしてた。だつてそのまま、自分のなべの前に戻って、おたま手に取ろうとしてるんだもん。なにもなかったみたいに。ってゆーか、ってゆーか、ユリコちゃん？いい

の、ついてかなくて?」

「いーのいーの。あらかた見当ついているから」

おたま上げて、軽く振ってるよ。ほんとに、どうでもいい わけないよね?

「ユリコちゃんは見たことあるの? あんなに大笑いしてるほのかちゃんって」

莉奈があたしの隣から声かけた。あ、そっか。化学部じゃちよつと違う、とかかな?

「ないけど、だいたい理由の見当はつくから。」

わからない、かな?」

あれ? ユリコちゃんがあたしと莉奈じつと見つめて ああ、ため息ついちゃった。なんだろう?

「それだけ自然だ、つてことかもね。わたしはまだまだ、か」

なんか、落ち込んでるのかな、って思ってた、いきなりがばつと起き上がった、

「さあ、それじゃ用意しとこっか」

ほんとにいきなりだったから、あたしも莉奈も

「へ?」

「なにを?」

つてな感じ。それ見たユリコちゃん、おたまで頭かきながら、

「ん? 久保田さん、さっき買ったじゃない。まさか、見てないとも思ってた?」

軽くウインクまでしてるユリコちゃんに、いっばいハテナマーク浮かべてる莉奈見ながら、あたしはひとりで冷や汗かいてた。

あ、あは、あはははは いやー、やつばすごいわ。ユリコちゃんって

パタン

夕方の理科準備室は、とびらを閉じると薄暗くつてよくわからないな。電気、電気、つと。

ほのかはまだ大笑い。ただ笑ってるだけなら、別

にいいんだけどね。ああ、それより、

「ほのか、ここの電気って、どこだっけ？」

笑っちゃってるから返事ないかな？ って思ったけど、一応訊いてみた。そしたら、笑いがふつ、と止まって、

「つけて、いいのね？」

え？

「つ、つけちゃ、まずい の？」

「ううん、ただ、わたしは警告しましたからね。それじゃ、つけるわよ」

ちよっと待てえっ！ って言う前に明かりがぱつとついた。一瞬、まぶしさに目をつむっちゃったけど、がさがさって音がしたんで目を開けてみたら げげっ!!

「な、な、な!?!」

一面、一面

「なあに、なきささっ」

灰色っぽい、ぐちゃぐちゃが動いて

「なにこれっつ!!」

「カニ」

へ？

「だから、カニよ。カニ。正確に言つとズワイガニね」
カニ？ カニ、っていつても 灰色で、ぐにゃぐにゃしたのがいっぱい、がさがさ動いて うえっ。

「おはあちゃまが、いっぱい取ってきてくれたのよ。それで、キトサンの分離実験をやったの。薬液につけると食べられなくなっちゃつから、甲羅だけ外してそれで、のこりを集めたらそんな風になっちゃって」

ぐ、グロいなあ。カニって、一皮むくとこんななんだ。って、違う。そういう問題じゃないって！
「なんで動いてんのよ!!」

言ったとたんに、動きがびたつ、と止まった。

え？ あたしの声で？

「ついでに、カニの足でロボット作るうと思っただけど 失敗しちゃった。うふ♡」

カニの中から出てるコード切つて、ぶらぶらさせ

ながら、にっこりしてるよ。も〜あ! 『うふ♡』じゃないっての、まったくさ。

はあ、もうなんだか、力が抜けるう

その場にへたり込んだあたしの前に、カニの足が
どンドン積みあがってく。

そのうち、カニ足が布で包まれて、あたしの手に
乗っかってきた。はいはい、運べばいいんでしょ、運
べばさ。 って、あれ? カニ足が動かない?

顔を上げたら、カニ足の上に手を乗せたほのかが、
じいっとあたしを見つめてた。

「これ見て逃げなかったの、なぎさだけだよ♡」
ちいさな、ささやくみたいな声。ちよっと困った
ような笑顔 あたしは空いてる手で、ほのかの広
いおでこをコツン、ととやった。

「い、いまさらなにあったって、逃げるわけないで
しょ? どんだけ付き合ってると思ってるのよ!」

言いながらぱつと立ち上がって、準備室のとびら

に手をかけたまま、あたしはしばらく動けなかった。

だから、背中にくっつくなんてば、ほのか!

もう、顔の熱いのが冷めないじゃないのよあ

「1年」

いきなり、ぼつん、って感じの音が、背中から聞
こえた。

あれ?、と違って振り向いたあたしの顔を、ほの
かが、じいっと見つめてる。

「ううん、まだ1年たつてないわ。たつてないのよ」
あ、さつきの目だ。なべの前で大笑いしちゃって
たときの目。

だから、あたしはここに連れてきたんじゃない。も
う、笑ってるくせに、目だけは今にも泣き出しちゃ
いそうなんだから!

「もうじき1年だな、って思ったらね、わたし、な
にかしたくなったのよ。投げたたこ焼きをキャッチ
できるように練習したり、ね」

あ!

あたしは、思わず声出しそうになった。

「でも、でもね、早食い競争のなぎさの顔見て、なにか違うな、って思ったの。わたしのしたかったことわたしが欲しかったのは、こんなのじゃない、って」
 やっぱり。あかねさんのあの言葉　きつと気付いてたんだ。ああ、あたしって、なんでこんな二倍のよっ！

「いや、ほのか。あたしはバカだからさ、あんまそついうこと考えて　」

あたしの口が、ほのかの手でふさがれた。横にゆっくり首をふったほのかの目から、涙がぼろぼろこぼれてる。

「違うの。バカなのはわたしだったのよ。欲しかったのは、そんな形なんかじゃなかったんだわ。」

自然に、なぎさを思い浮かべられること。わたし、いつのまにかできるようになってた。志穂ちゃんたちと同じくらいに。　こんなに嬉しいこと、ほかにある？」

自然にあたしをって、チヨコなべのこと？　　っ

て!?

あたしは、いきなり顔が熱くなった。さつきよりずっと熱い。そうだった。あたしだって、ユリコちゃんと同じことしてたんだけ。ヘンに考えなくても、自然に

熱を冷まそうと下向いたら、首に軽く手が回ってきた。耳元に小さな声で、

「きつと、なべのそこには、みんなの思いが沈んでるのよ。すくってあげよ。ね、なぎさ♡」

あつたかい息が消えるのといっしょに、準備室のとびらの開く音がした。

「ごめん、遅くなっちゃった！」

ほのかのあとから準備室を出たら、みんながあたしをじっと見てた。

「遅い遅いおっそ〜い！ もう食べ始めてるよ」「
 夫、そりゃ当然か。」

「とりあえず、わたしたちのから試食してくれる？
 はい、ほのか」

「なぎさは、あたしのからねー」

志穂のお椀を受け取って、あたしはじつと中を見
 つめた。ほのかも、ユリコちゃんを受け取って、同
 じようにしてるみたい。このそこに、思いが沈んで
 る、ねえ あれ、ほんとに、なにかある？

箸で中をつついてみたら、黒っぽいかたまりがあっ
 た。これって、もしかして？

「うわぁ チョコが沈んでるよ。食べていいの？」
 にこにこしながら、志穂と莉奈がうなずいてる。
 へえ、これってふたりの合作なのかな？ まいつか
 とりあえず、このチョコー！

「いっただぎー！ あむ」

なべはココアのいい香り。へえ、四角いチョコは
 煮てもいいようにアメかけてあるんだ。じゃ、アメ

の端っこちよつとかじって ええっ!!

「ん む？ むべっ、ぐぐぐべっ!!」

な、なにこれ!? 甘くない、っていうかっ！

「くえっ！ べっ！ べっっ！」

お椀の中にかたまりを吐き出して、あたしは水を
 がぶ飲みした。

かたまりは、すっごくいい香りを出してる け

ど、チョコじゃないよ、これ！

「志い〜穂あ〜！ カレーのもじゃない、これ！
 なんてもの食わせんのよっっ!!」

じろつとにらみつけたここには誰もいなかった。

どおこ逃げた？ って目で追おうとしたら、目の前
 にほのか立ってる。

「見たでしょ、ほのか。あんたは買いかぶりすぎ！
 こいつらの友情なんて、こんなもんよ!!」

八つ当たり気味にどなつちゃったけど、ほのかは
 くすくす笑いながら、あたしの方に手をすっ、と

差し出してきた。

「ええ、友情って、こんなものよね♡」
手にもつてたお椀に牛乳なべ。そこからツンとしたワサビのにおい。

ああ、ほのかの向こうで、にやっと笑ったメガネが光ってるよ。

「さあ、わたしのも、食べてみて？」

あたしに差し出したお椀からは、チョコのいい香り。すっごくおいしそうで、すぐでも食べたいんだけど

だけど、底のほう、なんか、動いてるっ !!

「もう、勘弁してよあ〜っ!!」

—おしまい—